

第2部会

完成によらなければ克服しえない『人類的悪』として構想されていたと見るべきであろう。

この『人類的悪』としての「根本悪」の導入は、『基礎づけ』や『実践理性批判』におけるカントの理論に重要な変更・発展をもたらした。『基礎づけ』における「目的の国」と『宗教論』における「倫理的公共体」ととつての神存在の意義、『実践理性批判』と『宗教論』における神存在の要請の意義の相違などは見落とすことができない。前者においては何れも、他者と切り離された個人による道德的完成の可能性が前提されており、神は人間の道德生活の成立自体に本質的な関係をもたないように見える。むしろ神は、人間の思い通りにならない「自然」の創造者として、徳に見合う「幸福」を担保するためにこそ要請される。また『基礎づけ』や『実践理性批判』では、法則違反へと人間を誘うのも感性を触発する「自然」であつて、『人間仲間』は法則違反とも「幸福」とも直接の関わりをもたない。これに対して『宗教論』では、個人を悪へと誘うのは彼を取り巻く『人間仲間』であり、さらに「幸福」も「自然」との関わりではなく、『人間仲間』との「比較」において規定される。それゆえ「最高善」も、個人の道德的完成（「最上善」）と「自然」に発する相応の「幸福」との結合ではなく、「根本悪」の克服を可能にし、それを通して各人が本来の「幸福」を得るべき「倫理的公共体」の実現として見られることになる。

しかし、『宗教論』第一篇と第三篇との間には、やはり埋めがたい溝があるのかもしれない。「根本悪」論は、『基礎づけ』や『実践理性批判』など批判哲学の道德論や行為論の延長線上

で悪を論じる思想の流れと、『人間学』や歴史哲学的諸著作など経験的な学の延長線上で悪を捉える思想の流れとの合流点であり、両者の総合の成否は全体としてのカント哲学の一貫性・統合性にまで関わる。この点、今後の研究を通じて慎重に判断したい。

カントの宗教論の意義について

氷見 潔

いうまでもなく、カントの『宗教論』（＝単なる理性の限界内における宗教）は、宗教についての彼の見解を最もまとまつた形で表明しているものとして、宗教の哲学的考察に貴重な指針を与える書とみなされている。しかしながら、私の見解では、この書は、実のところなお十分に正當かつ肯定的な評価を得ているとはいえない。むしろ不当に低い、否定的な評価を受けている面が目につく。そうした不当評価の代表的な面として、以下の二つを挙げねばならないであろう。

第一に、カント哲学思想内部での位置づけに関して、一般的には『宗教論』は三批判と同列に扱われてはいない。おそらく、それは元來啓蒙的な雑誌に掲載されるに適した内容の「論集」にすぎない、という見方が、そのまま同書の一段低い格づけにつながっているのであろう。第二に、カントは同書においてあくまで哲学思想の側から宗教考察に取り組んだのである

が、その人間考察が、キリスト教の原罪と恩寵による救済の教義に直面するに及んで、彼は理性の自律の立場を守ることができたのか、むしろ教義の超越性を前にたじろいでしまったのではないか、と疑いをもつ人が少なくない。ここで私は、カント『宗教論』に対するそうした否定的・批判的な見方を反駁して、同書がもつと高く肯定的に評価されるべき所以を明らかにしてみたい。

カント哲学内での位置づけについていえば、カント自身が『宗教論』刊行の際C・F・シュトイトリンに宛てた手紙の中で「この書で第三の問いに答えた」という意味のことを述べている。それによる限り、『宗教論』はカント哲学の第三の問い「私は何を望んでもよいか」に解答を与え、それがさらにカント哲学の総仕上げたる第四の問い「人間とは何か」につながっていくのであるから、同書の重要性はきわめて高い。にもかかわらず、三つの問いは三批判においてすでに答えられているはずと思う人は、カントの私的な手紙の中での新刊書自薦を額面通りには受け取らず、『宗教論』はせいぜいのところ第三の問いの解答に対する補足的説明を付け加えたにすぎないとみなそうとする。これに対して、私は、『純粹理性批判』の末尾に示されていた三つの問いに関する当初のプランと比較することから、『判断力批判』における重要な変更注目する時、『宗教論』が第三の問いに対する決定的な答えをもたらそうとするものであるとするカントの言明をそのまま受け取ることができ。したがって『宗教論』を「第四批判」と特徴づけるのもあながち無理ではないと思う。

原罪の教義との関係については、たしかに『宗教論』第一部本文の記述では、一貫して「根源悪」の抜き難さが語られている。そこからカントが理性の自律の立場に行き詰まったとか、批判哲学の挫折、あるいは宗教的超越を目の前にした理性の後ずさり、といったような事態が疑われたりする。しかし少なくともはつきりしているのは、カントが人間における善の原理の内在を「素質Anlage」と表現し、これに対して悪の原理の内在を「性向Hang」と表現している、ということである。「性向」は人間の自由に由来するが、「素質」は不変である。だから最終的には「素質」が勝利しなくてはならない。カントはそのことを、第一部の付録部分で語っている。それはもちろん理論ではなく、理性の力に対する信念の告白というべきものであるが、そのような形をとることによって、ここにおいてこそカントは理性の自律の最終的優越を宣言しているとみなされるべきであろう。

ヤスパース形而上学とその希望論

岡田 聡

本発表は、「希望の力」(„Die Kraft der Hoffnung“ in *Die Hoffnung unserer Zeit*, München Zürich (Piper), 1963) を手がかりとして、ヤスパース形而上学の一側面の提示を課題とする。